

PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1998年12月No.98

胎児を守る運動

満たされた時間

聖パウロは、「神を愛する人々すなわちみ旨によって召し出された人々のためには、神がすべてをその善に役立たせたもうことを私たちは知っている。」（ローマ人への手紙 八：28）と書いていらつしやる。それにしても、まったく意外なことに、クリスマスカードにはさまれていた、小さな手紙によって役立たせられた善を知った。

「ジェシーは二ヶ月前に亡くなりました。私はとても寂しいです。」とそこには書いてあった。「最期まで、私は彼を自宅で看病しました。彼が病気になる前から、二年の歳月がありました。それはとても満たされた時間でした。でも今は一日一日が辛いです。」

私の心は、友人のジェシーがもういないと突然知ったことで、重く沈んだ。そして私の友達のケイティーは深く悲しんでいる。けれど何故か、何かとても特別なものに触れたような私

の中に暖かい気持ち広がった。愛を与えるということ、愛する妻が死に行く夫を看病するという美しさ。二人には二年間の特別な時間があった。彼女は彼を病院にまかせず、自宅で看護したのだ。

自殺援助（案楽死）の多いこの世の中で、ジェシーは「尊厳ある死」を認められたのである。それは彼の妻が心地よさや慰めや愛を与えながら、全力をもって彼の命を延ばそうとしたことで成し遂げられた。

私が初めてケイティーとジェシーに会ったのは、40年前、私達が初めての赤ちゃんを病院から家に連れて帰った時だった。彼等はドアをノックし、微笑みながらそこに立っていて、腕には焼き立てのパイと赤ちゃんのおもちやを抱えていた。そして「近所の住人です」と挨拶された。

その後彼等はよく遊びにくるようになり、私達の小さな息子

と遊んでくれ、いつかいつしよに暮らせる「自分達の息子」を夢見ていた。

転勤で私達は何千マイルも離れたなれになってしまったので、「ジェシーの息子」に会うことはなかつたが、写真は見せてもらった。そして、ひんぱんにやり取りした手紙も、やがて、次第にクリスマスカードの交換だけへと少なくなっていた。

そう、ジェシーを自宅で看病し、彼の頼みを聞いてあげ、一日一日をできるだけ特別にしようとして張り切るの、いかにケイティーらしいことである。

数年前に私の叔父は、透析治療をやめることを、つまりは自分の人生を終わらせることを「選択」した。その理由？ 保険の限度？ 費用？ 家族への負担？ などであるにしても、一人の人の命が、意図的に終わらされたのである。そして別の親戚がジェシーと同じ診断、末期癌によって入院させられた時、食べ物と飲み物は与えられず、ついに彼は飢えと乾きの苦しみの中で死んでいった。どんな理由が伝えられたかつて？ 「もう望みはありませんでした」と言われて、けれどジェシーの場合だって、

望みは無かつたのである。

イエス様はある時おつしやつた。「天にまします父のみ旨を果たす人はすべて私の兄弟、私の姉妹、私の母である。」（マテオによる福音書十二：50）この神の家族の中で、ケイティーが私の姉妹だなんて、なんて素敵なのであるうか。

ケイティーの悲しみが癒されてくれば、彼女は安らかな心と暖かい思い出の中で休むことができるだろう。

神の定めた時間よりも早く命を終わらせてしまう人の為にこそ、私達は祈り同情しなければならぬと思う。「私達には二年の歳月がありました。それはとても満たされた時間でした。」と述べるケイティーとジェシーが味わった幸せを体験できなかった人達のために…。

ジーン・コンテ

避妊

一般的に信じられているのは反対に、避妊は擁護者が仕立て上げるような万能薬ではありませんでした。それは、いわゆる望まれない妊娠を減らしたのではなく、より多く招きました。避妊の承認は、広範な性の乱交と永久に増え続けるエイズを含む死を招く性病の急激な増大へと導きました。過去30年以上の間、避妊薬の生産と使用、そしてそれを人々に使うことを推奨する活発なマーケティング・キャンペーンは、おびただしい広まりを見せました。同じ時期、VD（性病）の発生率は、人々が自分たちの生活に襲いかかった悲劇的な衝撃と奮闘するにつれ、あ

る人々が表現するように流行の調和と言われるほどまで上昇しました。人々は中絶率が減少することを理由に避妊を正当化しますが、その逆が起こることが証明されています。法王ヨハネ・パウロ2世が最近の回勅「いのちの福音」の中で、避妊の精神は中絶の発生原因となります。このような手段の使用は性的な事柄に責任

を取ることを拒否する快樂主義的な精神に根付いており、子どもは自己を満たすために障害物となり、自己中心的な自由の概念を暗示するものです。それ故、性的遭遇の結果産まれる生命は、どんな犠牲を払っても避けなければならぬ敵となり、中絶が避妊の失敗に対する唯一可能で決定的な答えとなりますと言う内容の意味のことを書いています。そして、例え避妊に失敗しな

かったとしても、使用される方法は、しばしば女性にとつて重

い医学的危険をもたらします。多くの第三世界で、女性たちは頻繁に重い病気や不妊を女性にもたらす実験的な丸薬や注射を決まって受けさせられています。そして、滅多に避妊に関わる医学的危険性や、ほとんどの方法が時々或いは常に墮胎薬として機能することについての説明を女性達は受けることがあります。その結果、避妊法を用いる多くの中絶反対者である女性たちは、自分たちで気づかないうちに子どもを中絶しているのです。

結婚生活の中でお互い全てを捧げあうことよつて、夫と妻は生活の重要な部分である生殖の能力を包含することができません。もし彼らがこの関係に避妊法を取り込むのであれば、その自分自身の力を一方が退き、も

う一方が拒絶するため、その能力はもう完璧ではなくなりま

う一方が拒絶するため、その能力はもう完璧ではなくなりま

だれが安楽死を支持するのか

だれが安楽死を支持するのか。最近行われたワシントンでのシンポジウムで、デューク大学精神病学と薬学部のハロルド・ケーニグ博士は入院患者の抑うつ症と自殺行為の考えに関する莫大なデータから広範な情報を発表しました。彼の結論は非常に明瞭でした。医師による自殺補助（安楽死）に対する反論は以下の人達が大多数を占めています。（1）

だれが安楽死を支持するのか。最近行われたワシントンでのシンポジウムで、デューク大学精神病学と薬学部のハロルド・ケーニグ博士は入院患者の抑うつ症と自殺行為の考えに関する莫大なデータから広範な情報を発表しました。彼の結論は非常に明瞭でした。医師による自殺補助（安楽死）に対する反論は以下の人達が大多数を占めています。（1）

離婚が子ども達に及ぼす悪影響

両親に離婚経験のある六歳から十七歳までの子ども百七十人を調べたところ、「自分自身、家族、両親や友人とのつきあい方に、極度に不安を覚える」ことが多

両親に離婚経験のある六歳から十七歳までの子ども百七十人を調べたところ、「自分自身、家族、両親や友人とのつきあい方に、極度に不安を覚える」ことが多

ダウン症は病気ではない

数カ月前、夫が不意に「ダウン症の治療法があること知ってた？」と尋ねた。私はびつくりして、「どんな治療法？」と尋ね返した。そして、すぐに夫が読んでいた記事が言わんとする事をささつた。それは、「治療」とは名ばかりの不完全な人間を中絶によつて排除しようとするだけのことだった。

夫のケンも私も驚きはしなかったが、ぞつとすると同時に、そんな提案をする人間がいるんだなんて、怒りがこみあげてきた。当時私のお腹では三人目の子が妊娠八ヶ月に入つていて、その子がダウン症をもつて生まれるとは思ひもしなかった。今、生後三ヶ月のステファニーは、笑い、うーうーと声をあげ、物体を目で追つたり、姉のメグからたくさん抱擁やキスを受けるために顔をあげたりできる。社会一般の考えでは不完全かもしれないが、私達にはかけがえのない存在で、何一つ変わつてほしくない。子どもが障害を持つた状態と知つた上で産むことを選んだすべての父母に、神のご加護がありますように。娘は病気ではなく、優しい愛と保護を必要とする状態なだけだということを知ればなら理解してくれるでしょう。

夫の立場から見た十ヶ月

夫の立場から十ヶ月の妊娠期間について書くことは、非常にやりがいのあることでした。ほとんどの人が父親が経験していることにあまり関心がないのです。当然のことではあるのですが、全ての関心が母親の方に集まっているのです。

子どもを宿しているのは母親なのです。母親は途方もない肉体的、精神的変化を経験するでしょうし、つわりや体重の増加やお腹の膨張や出産の苦しみに絶えなければならぬのです。しかしながら、父親も実際、父親としての独特な立場から見守りながら父親なりに変化を経験しているのです。妊娠試薬による検査結果で興奮が始まります。試薬がピンクに変化したとき、私は自分の感情を抑えることができませんでした。私は世界中の人々に

知らせたいと思いました。しかし妻は医者を確認してもらうまで、待つてほしいと言いました。

医師が私達の希望通りであることを確認したのちに、私は自慢げに話し始めました。私が知っている全ての人に、そしてあまり知らない何人かの人もパパになるんだと言いながら私の胸ははち切れんばかりでした。それは大人になる儀式のようなものでした。最初の数ヶ月は心ときめくものでしたが基本的には平穩無事なものでした。それからつわりがやってきました。それは私達が家の引っ越しをしかけていたのもっとひどくなりました。唯一の問題は私達の新居がまだ入居できるようになってないことでした。私達はつわりの最初の一ヶ月を友人と過ごさなければなりませんでした。彼

らは思いやりがあつて、親切でしたが、そこは私達の家ではありませんでした。妻はその時ほど無力感を感じたことはありませんでした。いかなる言葉も彼女の苦しみを和らげるようには思いませんでした。彼女は触れられることも、抱き締められることもいやがりませんでした。だから私は自分にできることをしました。つまり、彼女に飲み物や薬を持って行ったり、彼女のために祈ったりしました。

まもなく私達は自分たちの家に引っ越ししました。つわりの最悪の状態はおさまりかけているようでした。次に医者に行った時、全く驚くべきことがありました。私達は初めて赤ちゃんの心音を聞くことが許されたのです。本当に生きた人間が妻の身体の中にいるのだという実感に感極まって、私は泣いてしまいました。

その夜妻が寝た後、私は寝ないで考えていました。私達に赤ちゃんが生まれるのだということを実感し始めたのです。すでに妊娠五ヶ月目に入っていたので、このことは奇妙に感じられるかもしれません。しかし、そのつもりがあるうとなかろうと、この世の中に生まれ出てくる準備をしている幼な子がここにいるんだということを実感できるようなったのです。私は今や私のもとなつた責任、つまりこの子を世話し、養い、保護し、そして育てる責任について考えました。それはあまりにも大変なことなので私はひざまづいて、この途方もない責任を全うできる知恵と力を与えてくださるよう様に祈りました。

私達は少し昔風なかも知れませんが、超音波診断装置があつてもそれを使って、男の子か女の子かを前もって知ることはしないことになりました。それは神様にまかそうと思つたのでし

た。

最後の数ヶ月間、私は妻のお腹が子どもの成長に合わせて大きくなるのを見守りました。妻は自分が膨らんで、むくんで、不細工だと思つていました。私が私にとつては今までに見たこともないような美しい女性でした。

最後の4週間が近づくにつれて、私達の興奮は、緊張感と合わさつていつも最高潮の状態でした。私は以前にもまして神様を求めるようになり、無事を祈つていましたが、主にこのような責任と貴重な贈り物を与えてくれたことに感謝を捧げていたのです。

それから、予期しないことが起きました。私達の赤ちゃんは予定より早く、正確に言えば3週間と4日早く生まれました。息詰まるような数時間のうちに、息子は生まれました。母親も赤ちゃんも元気でした。

父親になるといことは神様が与えてくださった素晴らしい贈り物なので

ランディー・ヒルトン

いとしい二本の手

決してつかむことのできない、二本の手
寒さから守ってやれない、二本の足
年を重ねることのない、一つの魂
涙をぬぐってやれない、二つの瞳

愛されたくて、あなたを見捨てた私
何も知らずにいとしい我が子を
寂しくて何もみえなかった
幼すぎた私を許して

決して見ることのない、美しい笑顔
私を求める小さな指
こうも自分を必要としている
小さな命を見捨ててしまった

愛されたくて、あなたを見捨てた私
何も知らずにいとしい我が子を
寂しくて何もみえなかった
幼すぎた私を許して

自由になりたくて、あなたを死なせた
今思えばなぜ、いとしい我が子を
かわいい声を聞くことはできない
あなたは黙って従うしかなかった

愛されたくて、あなたを見捨てた私
何も知らずにいとしい我が子を
寂しくて何もみえなかった
幼すぎた私を許して

決して見ることのない、あなたの遊ぶ姿
いつか歩き出す瞬間、手を取ってやる
こも
日々成長する様子も見られない
もちろん、将来について一緒に悩む
ことも

愛されたくて、あなたを見捨てた私
何も知らずにいとしい我が子を
寂しくて何もみえなかった
幼すぎた私を許して

主よどうかこの思いを我が子に伝えて
私が後悔していることも
あの子が泣かないよう近くで見守り
優しい子守り歌を歌ってあげて

キャシー・クラーク

養子縁組の奇跡

養子縁組。一つの言葉がいかに、ある人には大きな希望と喜びを与え、またある人には悲劇と大変な心の痛みを与えうるかということに私はいつも驚かされます。その言葉を口にするだけで、喜びの涙が溢れることも苦しみの涙が溢れることもあるのです。私は自分自身の経験からお話しているのです。私は一九七二年二月、生まれて二日後



に養子にもらわれてきました。一人の母のもとに生れながら、もう一人の母に慈しまれ世話される運命にあったのです。

誕生の奇跡に医者は今も戸惑いを感じ、養子縁組の奇跡に私は今も戸惑いを感じます。私は養子としてもらわれていくことについての話や冗談をいろいろと聞いてきましたが、それらはいかに私が養子だとは知らない人々によるものでした。

私はいつもこの機会をとらえて、養子にもらわれるということとは実際どういうものなのかをもっと理解してもらえようとしています。それはいつも「望まれた」という一言につぎるのです。

たいていの人々はその言葉の本当の意味を知りませんが、養子となった私たちは十分に理解する責任があります。私たちは、世話をするという大変な仕事を引き受けてくれた人々によって、望まれたという幸せを与えら

れたのです。

しかし、私の両親は私に話してくれた内容ばかりでなくその時期についても、実に変わった方法を取りました。私は14才で、私たちは休暇中でキャンピングカーの中にいました。

夕食前のテーブルについている時に、父は私に話しておかなければならない「大変重要なこと」があると云って話を始めました。私はすぐそれがただごとでないことがわかりました。父は、母が若いときに緊急手術で盲腸を摘出しなければならなくなり、その時の傷のせいで子どもを産めなくなった経緯を私に話しました。私はあまりよく考えずに座ったまま、同情してうなずきました。

父が話を続けている間に母が席に着きました。私の一番上の兄は養子だった！それを聞いて私は、そのことは結構かつこいことだと思いきや、それから私の姉も養子だった！それでも、私はそれから話がどうなっていくかわかりませんでした。しかし父が私の一つ上の兄も養子だと話し始めた時、私は突然顔が熱くなるのを感じました。「ほくも養子なの？」と私は叫びました。「そだよ。」と父は答え、母は私たちを見守っていました。その瞬間私は最高の気

分になりました。私は呼吸を整えるのに数分かかりましたが、本当に最高の気分になったのでした。私はまさに最高のタイミングで、両親が私を望んでくれたということとを教えられたのでした。私は両親の行為がほとんどの人々を超越したことであることがわかり、大いに感謝しました。

私はすぐにいろいろと質問を始めました。私の心は好奇心と興奮でいっぱいでした。誰が私を産んでくれたの？私が知らない兄弟や姉妹がいるの？私は自分の誕生日が本当の誕生日かしらとも思いました。私の両親は、隠し立てすることなく正直に答えてくれ、そのことで私は、自分が養子だったというショックに耐えるのに必要な力を与えられました。好奇心はあつたのですが、私を産んでくれ



た両親のことについてさほど知りたいとは思いませんでした。私は養子を受け入れた両親に、隠し立てすることなく子どもに思いやりをもって接するようにおすすめます。その問題をあなたたちがどうとらえるかが、あなたたちの子どもがその問題をどうとらえるかを決定することになるでしょう。あなたたちの子どもが質問をした時には、恐れずに答えてあげてください。正直に言ったほうがよい結果が得られるでしょう。そのうちに、子どもは真実を捜し出さずかもしれません。子どもが発見した事実が、あなた方が子どもに話したことと必ず一致するようにして下さい。

両親は、なぜ私が14才になるまで話すのを待ったのでしょうか。彼らは、子どもというのはいきなりすぐにかかったりいじめたりしがちであるということを心配し、私に対する配慮から待ったと言いました。待ちすぎることは危険について多くの人の話を聞いたことはありますが、待つことによって私は友達からのいやがらせに苦しむことなく成長することができたと信じています。もう少し年をとってから話されたなら、私はそのことを誰にも話さない、あるいはほんの限られた人にしか話さない可能

性がありました。私はみんなに話すことを選びましたが、それは善悪とは関係のない個人的な決断なのです。

全ての子どもが私と同じような反応をするとは限らないでしょう。私は自分のケースが一般的だとは思っていません。もつと混乱し、おそらく挫折感を感じ、怒りさえ感じることがしばしばあるものです。家庭の中で養子縁組を取り扱うことは非常に難しいことがあります、それによってあなたたちが結びつけている愛情にひびが入るようにさせてはいけません。

家族や友人やさらには養子を受け入れている他の家族や子どもたちからの助けを求めてくださる親が求め、そして全ての子どもにも与えられて当然の幸せなのです。私はあなたがたに、養子縁組の本当に建設的な面を見ていただきたいと思えます。私のケースだけでなく、全ての養子縁組に関してそうしてほしいと思うのです。私の知る限り、養子をもろうように強制された人は誰もいないのです。いいでしょうか、ただ子どもが産めないというだけで養子をもらわなければならないということにはならないのです。その決定は、よく考えた愛



い。親のリーダーシップと理解が、子どもがたどるべき建設的な道を敷いてやる手助けとなるでしょう。前途は多難であるかもしれませんが。



今日、養子を受け入れた何千人もの親が、子どもたちに対して抱く愛情と誇りを享受しています。彼らの生活は、抱き合ったりキスをしたり、壁に家族の写真を飾ったりする幸せな生活なのです。それらはあらゆる親が求め、そして全ての子どもにも与えられて当然の幸せなのです。

デビッド・マタヤ

中絶は

取り返しのつかないこと

私は五年ほど前に中絶をしました。その時私は19才、私のボーイフレンドは22才でした。そのボーイフレンドと私は今結婚しています。土曜日の午後に妊娠していることを知り、その次の週の火曜日に中絶手術を受けました。今考えてみれば、誰が二日間そのような重要な決断を理性的にすることが出来るでしょうか。病院のスタッフは、私が未婚であることを知っていたにもかかわらず、「両親や聖職者に相談すれば……」とは言ってくれませんでした。あの時、彼女は、スケジュール帳を取り出し、まるで歯医者か美容院での予約であるかのように事務的に私の予約を書き入れたのをはつきりと覚えていました。

現在の社会は、中絶が思わぬ結果をもたらし、女性に知らせることを怠っています。ありがたいことに、私は肉体的な後遺症はありませんでしたが、将来たくさんの感情的、心理的、精神的な後遺症を経験することになるかもしれないと、誰にも私に説明してくれませんでした。彼らはただ私に「組織を吸い出すだけだ」としか言わなかったのです。

私が中絶後経験するかもしれないうつ状態とか、怒りとか、不安とか、恐怖とか、自己嫌悪とかについて一度も話してくれませんでした。彼らは、自分が恐ろしい人間で他人を傷つける能力があると思うことが原因となって、数週間は眠れなくなり、食欲がなくなり、赤ちゃんや子どもや妊婦や世間一般の人々について、落ち着かない状態が続くだろうとは言いませんでした。彼らは私が自己嫌悪に陥り、自殺を考えるようになるとは決して言いませんでしたし、罪悪感や悲しみといった感情を克服するために、専門家の助けを必要とし、精神安定剤や抗うつ剤に頼るようになるとは一度も言いませんでした。

誰も私の魂がどんなにぼろぼろになるか言ってくれませんでした。

事情は女性によってそれぞれ違っても、共通点は多いのです。克服すべき主なものは、罪悪感と悲しみです。私たちはみんな、自分がしたことを後悔しています。私たちは後悔し続けているので、これから先やっていくためには自分を許さなければなりません。しかし、中絶の影響を受けている全ての人にとって最も悲しいことは、(そしてこの悲劇は、当事者である女性だけでなく、それに関わる全ての人、たとえば父親や祖父などにも影響を与えるのです。)それが取り返しがつかないことなのです。それは、ある期間自分を罰すれば赤ちゃんが返ってくるというものは赤ちゃんと返ってくるというものはないのです。そんなことは不可能なのです。夫と私は、私たちの赤ちゃんを取り戻すためなら、何でもするでしょうが……

匿名希望

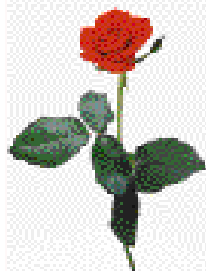
愛はかけがえのないもの

一九九四年六月、カルカッタの活動本部で五日間の日々を私はマザー・テレサと過ごした。何度も、私達は中絶やプロ・ライフ運動について語り合った。話の内容は何であれ、マザー・テレサは、誰かと一緒にいる時は常に相手とその瞬間に何を必要としているかをまず第一に考える人物であるということが実によくわかった。たとえ、こんな具合だ。「神父さん、ここはとってもお暑いでしょう。黒いシャツではなく白いシャツにお着替えになったらいかがですか？もつとお水はいかが？飛行機の手ケットは予約されていますか？」路上で出会った病気の人の対してのと同じような心配りを、彼女は会った人誰にでもしている。

マザー・テレサの人生とその活動は、「貧しい人への愛」ということに集中していた。彼女は、貧しい人々を愛した。しかし、彼女にとつての貧しさとは、ほかの人が考えるよりもっと深い意味があった。それが何かを理解するには、人間としての使命についての彼女のメッセージを理解しなくてはならないだろう。私達は愛し合うために創られたと彼女はよく言っていた。人を愛し人に愛されるということは、人間の使命であり、真価である。

貧しさの本来の意味とは、人を愛し、人に愛される能力に欠けているということになる。彼女はこれについて、一九九四年二月三日の演説でこう言っている。

「ある老人ホームに訪問した時のことは忘れられません。そこには、息子や娘に施設に入れられ、そしておそらくは忘れ去られている老人達がいました。そこでは、老人達には何でも与えられていました。十分な食べ物、快適な住環境、テレビ、何でもありました。でも、なぜかみんなドアの方をじっと見ていました。そして、誰の顔にも、笑顔はありませんでした。私はホームの女性に尋ねました。『こんなすばらしい環境にいるのに、どうしてみなさんドアの方ばかり見ているのですか？』と、うしてお笑いにならないんでしょう。』私にとつて、出会う人が、死のまぎわにある人でさえ、微笑んでいるということは、ごく普通のことでした。するとホームの女性はこう言いました。『これが彼らの日常なのです。彼らは、息子や娘が会いに来てくれるのではないかと待っているのです。子どもに忘れられて、傷ついているのですわ。』」



愛することを忘れると、心が貧しくなる。我々自身の家族にも、もしかしら孤独を感じていたり、傷ついていたたり、心配事を抱えている誰かがいるかもしれない。私達は本当に家族の一員であると言えるのか？家族と心をわかちあっているのか、ほかの誰かに任せっぱなしにはしていないか。家族と一緒にいるために自分を犠牲にしているか、自分自身の関心事を第一にしていないか。

心の貧しさのもっとも極端な例は、ほかの人間を人とも思わないことである。だから、中絶によって子どもを抹殺している社会は、物質的に貧乏な人間よりも貧しいと言える。中絶を容認している社会は、人を愛するという使命、つまり自分にとつて不都合な人をも歓迎するという使命を果たしていない。

マザー・テレサは、中絶クリニックから女性を救い出すのとまったく同じように、カルカッタの路上で死んでいく人を助け上げていた。愛とは、かけがえのないものである。愛とは、ほかの人を受け入れる寛容さである。相手が路上にいがやうが、子宮にいがやうが変わりはない。愛とは、その相手に栄養を与えてあげることである。単なる食べ物というだけの意味ではない。相手が人間として必要としていること、つまり、その存在に気づき、注目し、理解を示すことである。この認識不足こそが、マザー・テレサの「貧しい人」に対する活動を賞賛しながらも、彼女の中絶反対論には賛同しない人々が、結局どちらに対しても理解できないというこの原因である。私達は、お互いに愛し、愛されるために生まれて来た。マザー・テレサは前述の演説でこう問い掛けている。『どうやったら中絶しないように女性を説得できるのでしょうか？』

「ほかのことと同じように、まず愛情を持って説得することです。そして、愛とは自己を犠牲にしても与えることだということを思い起すのです。イエス様は、私達を愛するあまり、命さえも与えてくださいました。だから、中絶を考えている母親も、誰かの助けを得て子どもを愛し、自分の計画や自由な時間を犠牲にしても、自分の子どもの命を尊重しなくてはならないのです。」

我々は死という試練を克服することにより、隣人を歓迎できないような心の貧しさから逃れることができる。そして、自分を犠牲にして、与えれば与えるほど豊かになるような裕福さを発見できるように。

フランク・ハイボーン

事務所便り

今月も最後の月を迎えました。皆様お元気でしようか。お伺い申し上げます。

一年を振り返って、まず、皆様感謝の言葉をお送りしたいと思います。胎児のいのちを守るこの運動をいつも支えて下さりまして、本当にありがとうございます。

一番弱い、小さいのちが守られてこそ、この地上に平和がやってくる確信を持って、事務所では全国の公立中学校・高等学校へ、産婦人科へ、ミッション・スクールへ、教会へ、修道院へ、そして、一般家庭へと、毎月、『日本プロ・ライフ・ニュース』を発送し、いのちの大切さを述べ伝えております。

十月十七日の土曜日、NHKテレビの再放送で『この時代の・祈りのある暮らし』が放映されました。ご覧になった方もおられるでしょう。カルメル会の奥村一郎神父様が『祈りとみのり』と題して話され、「楽しみ」と「喜び」の日本語の使い分けを、「喜び」には痛みが伴うとおっしゃられました。クリスマスに向かっての良いお話だなと思いました。

今、事務所は会計面でピンチになっております。打出の小槌が欲しいです。皆様には11月号でお願いし、また、再度のお願いで本当に心苦しいのですが、金銭的支援をどうかよろしくお願い申し上げます。皆様のお宅でも、家計は最近の社会の不景気で、きつと苦しいことと想像しながらも、小さいいのちのために、痛みをともに荷なっていただけないでしょうか。下の振込用紙を切り取って、郵便局より、皆様のお心をお送り下さいますように、重ね重ねどうかよろしくお願ひ申し上げます。どうか、皆様お一人お一人が、喜びのクリスマスを迎えられますようにと心からお祈り致しております。

クリスマスおめでとございます！

日本プロ・ライフ・ムーブメント